

第18回大学図書館研究集会に参加して 情報リテラシー教育と大学図書館

坂 本 翼

1 はじめに

平成13年9月13日(木)～14日(金)に一橋大学の国立キャンパスで第18回大学図書館研究集会が開催された。総合テーマは『21世紀における大学図書館の役割と責務 社会の多様化・個性化・共同化に対応した情報資産の蓄積、活用及び展開』である。実際には次の3つの分科会で、先進的な取組みがなされている大学図書館関係者などから報告が行われた。学術情報の流通と共同化 情報リテラシーと相互協力 所蔵情報の公開と資料保存及び共同化、の各分科会が行われ、私は に参加した。それぞれの分科会での報告内容については、すでに冊子やホームページ上でも紹介されていることもあり、割愛させていただき、分科会での報告タイトルのみご参考として掲載するに止める(資料1)。以下の内容は今回の研究集会に参加し、情報リテラシー教育と大学図書館のあり方について特に印象に残った事や、今後大学図書館が取り組んでいかなければならないことについて所感を含めながら報告するものである。

2 情報リテラシー教育

(1) 情報リテラシー教育の役割

情報リテラシーという言葉が一般社会にどの程度普及したかはわからないが、こと大学や大学図書館にとっては重要なキーワードとなっている。情報リテラシーという言葉は広い概念を内包しているので、その意味するところはとらえにくいがおおよそ「主体的に情報を収集し、分析し、判断し、創作し、発信する」能力とのことである。

インターネットの普及などによるメディアの多様化は世の中の情報量を膨大なものにしたが、その情報は玉石混交であり、信頼度の高い情報を手に入れることは必ずしも容易ではない。また、情報を手に入れてもそれをいかに分析し活用するかには別の技術が必要となる。このような能力は今後の社会においては必須のものと考えられ、その能力を身につけさせるための大学の取組みが問われている。

(2) カリキュラムの中で

大学図書館では従来から、文献探索方法などの各種ガイダンスを行ってきた。これも一種の情報リテラシー教育ということもできるが、現在ではインターネットの発達などによりメディアの多様化に対応した内容が必要となっている。また、文献等の情報が図書館に集中していた時代と異なり現在はインターネットを介して各種の情報を個人で即時に引き出すことができるため、図書館という枠を超えた情報リテラシー教育が求められている。

今回の研究集会では情報リテラシー教育をカリキュラムの中で行っている大学からの報告があった。情報リテラシーが、図書館の利用者のみに必要なのではなく、すべての学生にとって必要不可欠なものであるとするならば、むしろそれを身につけるための教育はカリキュラムの中で行われるべきともいえる。

情報リテラシー教育としての主な内容は図書館の使い方などの基本的なものからインターネットを使っている情報探索法、論文の作成方法など様々である。大学によっては、学生のインターネット利用のアカウント取得にガイダンスの受講を条件としているところもあった。インターネット上での情報の取得や発信は表現の自由、プライバシーの保護、著作権問題など、様々な問題も抱えている。そのような問題を未然に防ぐためにもこのような対策も必要とされるのであろう。

カリキュラムの中で情報リテラシー教育を行っている大学で多くとられている方法は、情報リテラシーに関わる科目の講義の何コマかを図書館員が担当するというものである。講義の方法は多人数が対象の場合、ビデオ上映や、講義担当者のパソコン操作画面をプロジェクターでスクリーンに投影するなどに対応している。

このようにカリキュラムの中で情報リテラシー教育を行うことは効果的と考えられるが、当然様々な課題を抱えている。全学生を対象に漏れなく行うことが目的の一つであるとすれば、必修科目の中で行

うことが望ましいが、それが叶わなかったり、学部によってはカリキュラムの中で行えるところとそうでないところが出てきてしまうということがある。また、カリキュラムの中で行うということはそれに対する評価をどうするのかということや、それ以前に教員側からの理解を取り付けることが難しいという指摘もあった。図書館員が担当することの問題としても、それだけの能力を持つ人材の確保や育成、また、その内容をどうするかなども大きな課題である。

(3) 図書館ホームページによる支援

情報リテラシー教育の一翼として欠かせないのが図書館ホームページの存在である。現在では、インターネットを介しての各種データベースやホームページからの情報収集は必要不可欠なものである。しかし、既に述べたようにインターネット上の情報は膨大なものであり、その中から必要とする情報源を探し当てることは簡単とはいえず、その情報の信頼度も様々である。このような状況の中で、利用者を必要な情報源へとナビゲートする役目を担っているのが図書館ホームページである。図書館のホームページを開けば、たとえばじめて利用するとしても、ある程度自力で求める情報の収集ができるような構成になっていることが望まれる。また、インターネット上の情報源を含めた情報収集のためのノウハウなども、ホームページ上で大いに公開していくべきであろう。本学図書館でも図書館ホームページについては、利用者への情報窓口として積極的に取り組んでいるが、今後も絶えず更新し、充実させていくことが必要である。このような図書館ホームページの存在があつてこそ、情報リテラシー教育もその効果を十分に発揮できると思われる。

3 おわりに

今回の研究集会は東京で開催されたので、限られた時間ではあったが一橋大学図書館をはじめとする先進的な図書館をいくつか見学することができた。最近建設された図書館はさすがによく考えられており、いずれもゆったりした閲覧スペースがあり、館内の検索用パソコンも充実しているなど感心させられる点も多かった。このようなハードの面はもちろん大事であるが、今後それにも増して重要なのが利用者サービスの向上や情報リテラシー教育の充実であるといえる。

関西大学図書館での情報リテラシー教育（図書館ガイダンス）の取組みについては、拙稿にて詳しく報告しているのでそちらを参照していただきたい（脚注）。なお、その報告を書いたからまだ2年ほどしか経過していないが、情報化の進捗はこちらの予測を上回るものであり、その後図書館内でのインターネット検索コーナーの設置やWeb版データベースの増加などから、その構成に一部手直しを施したり、現在もその検討を行っている最中である。

情報リテラシー教育というのは図書館ごとに考え方や実践方法も様々であり、これが標準という明確なものもまだ固まっていないといえる。今後いずれはパソコンの存在がもっと身近になり、パソコンの操作や知識に限れば子どものころから情報リテラシー教育を受けて育ってきた学生が大学にも入学して来ることであろう。そうなれば大学での情報リテラシー教育も現在と異なったものになるであろうが、それまでとはごく基本的なことから段階を踏んで行うことが必要であろう。情報リテラシーというのは大学を含めた学生時代に実習し能力を養い、社会に出て実践することになる。大学だけでなく社会に出て役立つ能力を身につけさせるための必要不可欠な教育として考えられるべきであろう。その後その能力をどう伸ばしていくかはやはり本人の努力次第である。大学では基礎力をつけさせ、それにどう興味をもたせるかという動機づけこそ必要とされるのではないと思われる。

注 坂本翼 塩津哲子 “クローズアップ「図書館ガイダンス」”『関西大学図書館フォーラム』第5号 2000年 p.59～62

(資料1)

分科会発表者名とテーマ

第1分科会 学術情報の流通と共同化

- 長谷川 豊祐 『E-Commerceと学術雑誌』鶴見大学図書館
尾城 孝一 『学術コミュニケーションの変容と大学図書館』国立国会図書館
木下 伸二 『東京大学電子ジャーナルの現状と国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォースについて』東京大学附属図書館
南部 好江 山本 裕之 『TAC(多摩アカデミック・コンソーシアム)の相互利用とTLL(TAC Library Lending)の概要』国立音楽大学附属図書館、国際基督教大学図書館
塚田 吉彦 『「四大学連合」と図書館活動』東京工業大学附属図書館
河谷 宗徳 『地域の図書館ネットワークと大学図書館』三重大学附属図書館
中本 悦子 『24時間開館サービスの現状と課題』北陸先端科学技術大学院大学附属図書館

第2分科会 情報リテラシーと相互協力

- 石川 亮 『学生の豊かな読書のための選書方法』桜美林大学・短期大学図書館
高橋 哲也 『授業を担当して資料を作る』東京外国語大学附属図書館
山田 雅子 『大規模大学の1年生に対する情報リテラシー教育と図書館』慶應義塾大学日吉メディアセンター
矢崎 省三 大關 玲子 『大学図書館を使った「子供インターネット教室」の試み』東京農工大学附属図書館
田中 俊二 『大学図書館と情報リテラシー教育のあり方を探る - 山口大学の取り組みから - 』山口大学附属図書館
仁上 幸治 『ホームページ上に「万能工具箱」を！ 情報リテラシー支援装置としての上部団体の役割 』日本図書館協会 [早稲田大学図書館所属]
高橋 克明 岩元 重紀 『情報リテラシーと大学生の知性・教養』横浜市立大学学術情報センター

第3分科会 所蔵情報の公開と資料保存及び共同化

- 叶井 貴一郎 『「一橋デジタルアーカイヴズ」計画について』一橋大学附属図書館
岡田 暎子 『電子画像データベースへの取り組み』奈良女子大学附属図書館
黒澤 公人 相徳 真理 『高密度保管書庫としての自動化書庫の事例報告 国際基督教大学図書館における自動化書庫システムの活用 』国際基督教大学図書館
田中 榮博 『九州地区における学術情報の共有化』九州大学附属図書館
河村 俊之 『大学図書館における社会貢献策』横浜市立大学学術情報センター
田淵 正雄 『古典籍の蒐集とその利用・保存 天理大学附属天理図書館の軌跡 』天理大学附属天理図書館
吉井 良邦 『古文書資料の保存とデータベース構築および公開方法 大阪市立大学学術情報総合センターにおける事例報告 』大阪市立大学学術情報総合センター

(閲覧参考課 さかもと つばさ)